

性欲で勉強が
手につかなくなった
息子のために
母親である私が・・・
昼下がりの罪深い決意
前編

性欲で勉強が手につかなくなった
息子のために母親である私が・・・
昼下がりの罪深い決意 前編

先日のことです。

自宅前の電線に止まったスズメたちが、楽しそうな鳴き声をあげている麗らかな昼下がりでした。

世間は夏休み。夫もここ最近では会社が閑散期で日々にゆとりを持っていますし、主婦の私も比較的忙しさから解放されたような穏やかな心持ちでいました。

私の名前は夏木優里子（なつきゆりこ）。主人の智昭（ともあき）と一人息子の伸二（しんじ）と現在3人で穏やかな日々を過ごしています。

私は二軒隣の中西佐由奈（なかにしさゆな）さんと自宅のダイニングキッチンの椅子に座って話をしていました。

「そうなのお・・・でも仕方ないわよ、その年頃の子ってそういうことに凄く興味があるのよ・・・」

佐由奈さんは私より5歳年上。ご主人とは共働きでOLを務められており、年齢でも人生経験でも私より先輩です。ご主人もうちの旦那より少し上で、お子さんはうちの伸二より6つ上の社会人の娘さんがおられます。

話を始めて30分ほど経過した頃だったでしょうか、私たちの会話はいつものとりとめもない近所付き合いや趣味や友人関係の話題とは少し逸れた内容へ移っていました。

その内容とは、以前私が伸二の“自慰”を目撃してしまったことです。

先々週の木曜日、ここ最近ではめずらしく主人が仕事で少し遅れると連絡が入りまして、疲れて帰ってくるであろう主人と入浴の時間が重なっては困ると、学校から帰った伸二を夕食前に入浴することを勧めに二階の彼の自室へ向かいました。

何せ、特別なことではなくよくあることですので、確かに息子であっても礼儀は必要と分かってはいるのですが、伝えることを優先し、私はノックを

軽くしかせず息子の返事も聞かないまま勢いよく息子の部屋に入ってしまった。

すると、伸二はドア側の壁に沿って置いてある机の上のパソコン画面を見ながら、椅子に座って一心不乱にペニスをしごきたてていたのです。

！！！！！！

伸二の耳元にはヘッドフォン。

スリッパで音を立てて階段を駆け上がった私の足音にも、軽く叩いただけのノックにも全く気づかなかったのでしょ。

瞬時に正面右側のドアから入って来た私に気付いた伸二は、非常に驚いた様子でヘッドフォンをもぎ取り、大慌てで回転式の椅子ごと後ろを向き、叫びました。

「ママァッ！！ひどいよお！ノックもせずに部屋に入ってくるだなんてっ！！」

きっと混乱していたのでしょ。叫ぶ伸二の語尾が女の子みたいに甲高く跳ね上がっていたのを覚えています。

私もノックをしなかったわけではありません。伸二は自分がヘッドフォンをしていたことも棚に置いてしまうくらい、パニックになっている様子でした。

だけど、パニックになるということに関しては、とても息子の様子を細微に長々と述べるような余裕は私にはありません。

なぜなら私こそが、あるいは息子以上に動揺していたからです。

「し、伸二っ！！お風呂・・・は、はいったらどうかなって・・・言いに来たのっ！」

伸二から即座に目を背け、ドアを閉めた後勢いよくそう言い放ち、私は階段を駆け下りました。

何も見ていない！！首を振ってそう言い聞かせながら何もなかったかのように急いで夕食を作り始めた私ですが、胸はとてもざわついていて、その後の数分の記憶が曖昧なほどです。

その後、落ち着きを取り戻した様子の伸二は、恥ずかしかったのかあえてその日の夜の出来事に触れることはなく平然を装っているように見えました。

だけど、伸二はのんびりしている子ではありますがそれほど鈍感でもない

ことを知っています。心のどこかではちゃんと覚えていたはずですが。

そして、もうわざわざ言う必要もないかもしれませんが、それは私も同じでした。私自身、伸二とその後何もなかったかのように接しながらも、何気ない会話をしながらも、心の片隅で決して消えることはなかったのです。

ずっとずっと“その光景”が心に焼き付いていたのです。

息子の

“予想なんてとても出来なかったくらい成長していた大きなペニス”
が・・・。

体験版はここまでです。

もし気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけると幸いです。